

令和 4 年度

鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻

芸術・体育系教科実践高度化コース 保健体育科教育実践分野

学修成果最終発表会



日時：令和 4 年 2 月 11 日（木）13：00～18:00

場所：B201 教室



令4年度
学校教育研究科高度学校教育実践専攻
芸術・体育系教科実践高度化コース
保健体育科教育実践分野
学修成果最終発表会

1. 日時: 令和4年2月11日(土)13:00～18:00

2. 場所: 鳴門教育大学B201

3. 日程

(1)開会の辞 コース長 南隆尚

(2)口頭発表 一人30分(発表時間15分, 質疑13分, 交代2分)

(3)閉会の辞

発表者	指導教員	開始時間	論文題目
松本 博幸	湯口 雅史	13:05	「よい体育授業」づくりの実践 -小学校6年生ゴール型の授業を通して-
松田 元宏	湯口 雅史	13:35	体育科における学びの質の向上を目指した学習評価の在り方 -授業で活用できる「評価イメージマップ」の作成-
天羽 つかさ	湯口 雅史	14:05	「高校の体育授業における体育教師の専門性について -選択制の授業実践(バドミントン)を通して-
堤 亮太	湯口 雅史	14:35	体育の授業への積極的な参加が難しい子どもが楽しみながら運動に取り組むことのできる体育授業づくり ～跳び箱運動の実践を通じて～

休憩5分

甲本 裕次郎	松井 敦典	15:10	体育活動に関する適切な態度の育成を目指した授業実践 ～豊かなスポーツライフの実現を目指して～
大路 柊人	藤田 雅文	15:40	運動部活動と体育授業における生徒のつまずきと教師の言葉かけに関する実践研究
坂口 真心	綿引 勝美	16:10	高等学校体育授業のサッカーにおける授業研究

「よい体育授業」づくりの実践 —小学校6年生ゴール型の授業を通して—

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 松本 博幸

キーワード: よい授業, 社会構成主義, 形成的評価表

実習責任教員 湯口 雅史

実習指導教員 藤田 雅文

1 課題研究計画の設計

1.1 課題研究の動機

私がこれまで受けてきた体育の授業は、「練習→試合」の流れで授業が進む授業構成がほとんどだった。練習は試合で使う動きを身に付けるためのものであり、単元後半になると、技術の獲得を確認するスキルテストが実施された。

大学院1年生の時に北島町内の小学校で9月6日から10月1日までの4週間、主免教育実習に参加した。実習では、小学校5年生を対象に短距離走の授業を2回行った。この授業は、これまで受けてきた授業を思い出し、「練習→試合（測定会）」の流れで計画し実施した。授業では練習場面で、速く走るために気を付けることを丁寧に説明し、ラダートレーニングを行った。私は、走ることの気持ちよさや楽しさを味わってほしいと思い実践した授業だったが、授業内容は、速く走るために必要な技術を身に付けさせるための授業であったのではないかと振り返る。学習内容を教師が決め、速く走ることを楽しむためには、最低限の技術が必要で、この学習内容は教師が設定するものであると考えていた。だが、学習指導要領（H29 告示）では、第5学年及び第6学年の陸上運動領域・短距離走・リレーを「一定の距離を全力で走ったり、滑らかなバトンの受け渡しをしたりすること。」と示されている。このことは、私が身に

付けさそうとした、速く走るために必要な技術やスタート技術は必ず指導する内容であると示していないのではないかと考えた。私が受けてきた体育の授業は、運動が苦手な子供は楽しくないと感じたり、体育が苦手と感じてしまったりするような授業内容だったのではないかと振り返って考えてみた。また、これからの教科は、個別最適化学習を求めていかなければならないと文部科学省が答申を出していることから、「よい体育授業」はどのように考えていけばよいかと疑問をもった。

上記の経験から、「よい体育授業」をするためにどのように授業をすればよいかを観察することを目的として、教科課題設定フィールドワーク（以下、課題設定FW）に参加した。課題設定FWでは5年生に配属され、ベースボール型授業の観察と実施をした。単元開始時は、ルールや用具などの場を最低限提示し、子供全員がベースボールの面白さを実感できるようにしていた。そして、子供の意見からルールを追加していき、子供と一緒に授業を創っていく様子がみられた。これまで、わかるようにしてあげること、技能を身に付けてあげることが学習だと考え、教師は子供がわかり、できるようになるための支援をするものと捉えていたが、設定FWで、観察、実践した授業は、子供の視点から運動の特性を捉え、場を整える、参加を促し

支えるといった授業であった。私は教師の視点で運動の特性を見ていたが、子供の視点で運動の特性を考えることで、このように授業が変化することに驚いた。この経験から、単元を通して子供がベースボールの面白さを理解し、ベースボールを上手くなろうと子供が主体となって、いろいろ工夫し、挑戦していく授業ができるようになりたいと切に思った。

1.2 課題研究の目的

主免教育実習や課題設定FWの経験から、私が受けてきた体育の授業や私が「よい」と思っている体育の授業が今の時代に合っていないことに気付くことができた。将来の変化を予測することが困難な時代に、子供には、現在と未来に向けて、自らの人生を拓いていく力を育成することが求められている。また、自らの生涯を生き抜く力を培っていくことが問われる中、新しい時代を生きる子供のために教師は授業をしていかなければいけないと考えた。そのような「よい体育授業」ができる教師力を身に付けることを目的とする。

2 課題研究の方法と実際

2.1 本課題研究で設定する「よい体育授業」の条件の設定

- ① 丁寧なマネジメント：用意、片付けの方法を決めておく、話し合いの場面で何を話し合うか明確にして行う。また、見て分かる、聞いて分かる働きかけを行うことで、分かりやすく短い説明をすることができる。
- ② 授業の雰囲気：教師がやる気を引き出す指導をすること、豊かな表情で子供に関わることで、授業の雰囲気は良くなる。教師は、今何が上手くいっていないのかを一緒に考え、どうしたらうまくいくのかを一緒に考え、さらによりよい方法がないか一緒に考え、子供

が自分なりの仕方で解決することを促す存在にならなければならない。

- ③ 子供同士の学び：教師が指示しなくても子供が自分から他の子供に質問すること、聴き合う関係をつくること、他の子供の動きを見たりすることで生まれるものである。そのために、面白さに注目し、様々な違いを尊重しつつ、どうしたらみんなで面白さにふれられるか子供自身が自分ごととして考えることが必要である。また、子供同士の関わりが自発的に行われるためにも子供が主体的に活動できる授業をしなければならない。
- ④ 子供全員が夢中になれる教材：子供の実態に適した場や用具を使い、運動の「本質的なおもしろさ」や楽しさを子供の視点で捉え、子供をそのおもしろさや楽しさに誘い込むことができるような教材を設定することが必要である。
- ⑤ 効果的な問い：教師から与えられた課題ではなく子供に必要感のある問いであり、子供のつまずきを解決するためのものである。また、答えがひとつにならないこと、新たな問いが生まれるきっかけになること、何度もその問いについて考えることが必要である。
- ⑥ 子供の見取り：子供を内面から見ることで、できたかどうかではなく、何をしようとしたのか、どうしてそうしようと思ったのかという学びの過程を見取ることである。教師は、子供の本音や願いを見つけ、子供の思いをくみ取りながら、子供とともに授業を創っていき、子供の状況をよく見詰め、つぶやきや声を丁寧に聴いていくことが必要である。
- ⑦ 活動中の声掛け：良いプレイを評価したり、一緒になって喜んだり悔しがったり、時にアドバイスしたり賞賛したり励ましたりす

ることである。また、コミュニケーションや観察を通して、子供の状況を把握し、子供が自分のゴールに意識を向けて行動できるように促す声掛けをしなくてはならない。

- ⑧ 子供の実態に適した学習過程：子供が自分たちで課題を発見し、追究し、解決していく学習過程である。そのために教師は、子供の課題を把握し、解決するための方法を理解しておかなければならない。授業が進んでいくと新たな問いが生まれ、新たな発見と追究が生まれる。この学びの連続で子供は成長していく。

これら 8 つの条件を意識して授業を行えば「よい体育授業」が実現できると考えた。

2.2 授業実践の振り返り

①授業実践の概要

第 6 学年ボール運動領域ゴール型「ウォーキングサッカー」の授業（7 時間単元）を実践した。サッカーに関する思いや願いを記述してもらった事前調査から、サッカーが好きではない子供が半分近くいることが分かった。サッカーが好きではない理由として、ドリブルやパスが苦手、ボールがぶつかるのが怖い、サッカーが得意な人しか参加できないと書いていた。不安なこととして、周りの人に置いて行かれること、チームの足を引っ張ってしまうこと、チームの強さが平等にならないことと書いていた。苦手なことがあっても前向きに参加でき、ゲームに安心して取り組み、得意な子供だけがボールを持つのではなく子供全員が参加でき、楽しめる教材の工夫が必要であると考えた。

②授業チェック表の活用

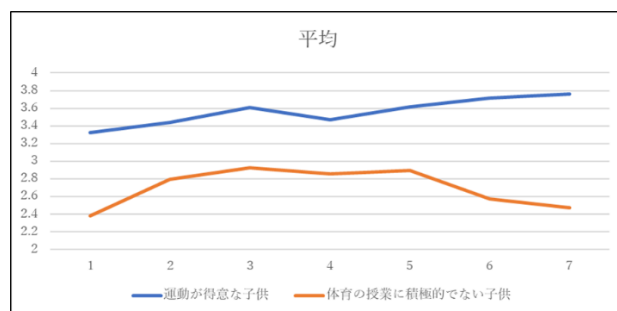
ボール運動領域ゴール型「ウォーキングサッカー」の授業で「よい体育授業」であったかどうかを子供の視点から評価してもらうために、

授業チェック表を作成した。授業が終わった後に、子供に授業を振り返ってもらい、授業チェック表で振り返ってもらった。授業チェック表には各項目 4 段階（①まったくあてはまらない②どちらかといえばあてはまらない③どちらかといえばあてはまる④とてもよくあてはまる）で丸を付けてもらった。

また、授業チェック表の結果の項目に対して、まったくあてはまらないを 1 点、どちらかといえばあてはまらないを 2 点、どちらかといえばあてはまるを 3 点、とてもよくあてはまるを 4 点として得点をつけ、各項目の平均値を各時間計算した。そして、各項目の平均値と各時間の表とグラフを作成し子供にとって「よい体育授業」が行えていたか、また、値の変化の原因を考察していく。

2.3 授業の実際

「走ってはいけない」とすることで児童が持っているサッカーの授業に関する不安をなくすることができるのではないかと考え実践した。実際にやってみると、苦手な児童は楽しく取り組む姿が見られたが、積極的に参加できなかった児童もいた。



男子 18 名女子 16 名の中からサッカー経験者を含む運動が得意な子供と体育の授業にあまり積極的でない子供の授業チェック表の結果を比べてみると値に大きく差があることが分かる。その原因を考えてみると、運動が得意な子供にとって初めて「ウォーキングサッカー」をして

みて、普段しているサッカーとの違いを実感しながらも実際にしてみると普段しているサッカーと面白さや考えることが変わらないことに気付き夢中になることができたから値が増加していったのではないか。体育の授業にあまり積極的でない子供にとって、初めは走ってはいけないうことで、安心して授業に取り組むことができていた。それによって、ボールに触れる機会が増えていったから値が増加していったと思う。しかし、授業が進んでいくにつれ、攻撃と守備のレベルが上がり、考えることが難しくなっていたことや、安心して参加しにくくなっていったため、ゲームに参加しにくい状況になってしまったと考えた。

2.4 考察

先述した「よい体育授業」を実践するための8つの条件から振り返ってみる。

条件②である授業の雰囲気をよくするために、サッカーの楽しみ方を理解することや、子供が課題を見つけて解決することが必要だと考え、コートに入って一緒にプレイすることは有効な方法だったと思う。そして、条件⑥である子供の見取りで、上手くいっていない子供・チームに積極的に関わった。上手くいっていない子供・チームが今何に困っているか子どもの視点にたって一緒に考えることで、子供は考えることが明確になっていったと思う。メンター教員と実習校の授業観察者との振り返りでは、条件④である子供全員が夢中になれる教材のためのルール設定、条件⑤である効果的な問いになっていなかったから、ゲームの楽しみ方に問題が生まれてしまったのではないかと振り返った。ルール設定ではトラップしたボールを取ってはいけないう、走ってはいけなうとしたことで、「ドリブルをしてもすぐに取りられてしまう

だろう」「ドリブルをする子供は少なくなるだろう」と思っていた。しかし実際にやってみるとサッカー経験者がドリブルでボールを運ぶ、トラップミスとドリブルの判断がつきにくい、ドリブルをしている時に走っているか歩いているかが分かりにくいといった状況になっていた。また、パスやトラップなどのボール操作が難しく、子供が考えていることがプレイに生かされない場面があった。トラップする時に手で取ってもよいとすることで、落ち着いてトラップしてパスする子供がほとんどであったが、パスのスピードが強すぎる時、弱すぎる時、狙ったところに行かなかった時があった。トラップだけでなくパスにもルールの工夫をするべきだったと振り返った。ゲームの楽しみ方として、ボールが蹴れたから楽しかった、点が決めれたから楽しかったなどの振り返りがあり、今の状態に満足している子供が多かった。チームの状態を見ると上手くいっていないように見えても振り返りでは楽しかったと書いていることから、ゲームの楽しみ方がバラバラなチームが上手くいっていない原因だと思った。上手くいっているチームは「チームで協力できて楽しかった」「チームで上手くできて楽しかった」と書いていることから、チームのことを考えて活動していることが大切だと思った。面白いことだけでなく、ゲームの楽しみ方を全体で共有することで、積極的でない子供の参加を促すことができると考えた。

3 今後の展望

今後、「よい授業」を実現するために、子供の思いに気付き、子供の学びをより深めていくための支援を行っていきたい。そして、これまでの学びを生かしながら教師が子供のためにできることを日々考えていきたい。

体育科における学びの質の向上を目指した学習評価の在り方 ー授業で活用できる「評価イメージマップ」の作成ー

高度学校教育実践専攻 教科実践高度化系
芸術・体育系教科実践高度化コース
保健体育科教育実践分野
松田 元宏

実習責任教員 湯口 雅史
実習指導教員 田中 弘之

キーワード：学習評価，自律型学習者，学びの地図，見取り，評価イメージマップ

1. 課題研究計画の設計

1.1 課題研究の動機

現行の学習指導要領（H29 告示）には、今後の子どもに必要な「資質・能力」として、①「知識及び技能」、②「思考力、判断力、表現力等」、③「学びに向かう力、人間性等」の「三つの柱」として整理されている。これに伴って、評価に関わる指導要録の「観点」にも反映・対応・一致させる必要性が示され、①「知識・技能」、②「思考・判断・表現」、③「主体的に取り組む態度」の3観点で一体化を図られることとなった。体育科においても、「技能」をどう捉えていくのか、「主体的に取り組む態度」をどのように評価していくのか、また、そのためにどのような学習内容にすべきかなど見直していかなければならない点が多い。子どもの資質・能力の育成へとつなぐために、評価の視点をより明確化できるようにしていかなければならない。

置籍校において昨年の夏、「体育科における学習評価に関するアンケート」を実施した。その中で、「観点別学習状況の評価についてどう感じるか」を選択する問題において、3観点共に「悩む」、「少し悩む」と感じている回答が多かった。とりわけ、「思考・判断・表現」や「主体的に取り組む態度」の評価が難しいという回答が多くみられた。その理由は、「子供一人一人をどのように見取れば良いのか分からない」、「教師によ

って評価の視点が異なる」などが記述されていた。つまり、目指す子どもの姿や動きを見る視点が曖昧なことにより、授業で何を支援してよいか難しいと感じている教師が多いと言える。

2019 年 1 月に、中央教育審議会より、「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」が示された。これは、現行の学習指導要領の下での、学習評価の在り方について、基本的な考え方や具体的な改善の方向性についてまとめられている。その中で、「学習評価について指摘されている課題」では、「評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない」、「教師によって評価の方針が異なり、学習改善につなげにくい」などが述べられていた。

このような課題に応えるべく、文部科学省のワーキンググループから①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと、②教師の指導改善につながるものにしていくこと、③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくことが基本的な方向性として示された。

1.2 課題研究の目的

これまで述べてきた内容における共通の課題として、「評価の視点が異なる」という点が挙げられる。そこで、学年の教師間や子どもと教師との間で、評価観を共有しておくことが、「学習評価の改善の基本的な方向性」に示されたこと

につながっていくのではないかと考えた。そのために、評価の視点を設定し、子どもを見取る手立てとなるツール（評価表）を作成していくことを本研究の目的とする。

2. 課題研究の実際

2.1 課題研究の計画

実際の授業実践を通して評価の視点の明確化を図ろうと、2022年4月より、置籍校である津田小学校において、課題研究の実践を行った。各学年3クラスある中で、実践する領域に関しては、1学級の授業を単元通して担当させてもらった。残りの2学級については、事前の「評価表」をもとに同じ評価の視点で授業をしてもらい、単元を進める中で、対話しながら「評価表」の洗練を図ることとした。今回作成した「評価表」は、ルーブリックの形と似ているが、レベル設定ではなく、学びに対する参加の仕方から評価の視点を示し、子どもの学びの状況を見ていくようにした。また、実践する単元については、置籍校の体育年間計画に準じてそれぞれの学年で担当させてもらった。

2.2 フィールドワークⅠの実践

ここでは、第1学年「マット・跳び箱を使った運動遊び」の実践について述べる。

(1) 単元の概要

回る場と乗り越える場、よじ登る場、ジャンプできる場を用意した。単元の導入では、評価表の「ために」の視点から参加できるかどうかを見るようにしたが、どの子どもが夢中になって遊んでいた。「回り方・乗り越え方」などの情報を共有することで、「どうやってはしっこまでいくか」の選択肢が増えていくように感じた。子どもたちの動きを見ると、「行き方」というテーマから技能の質的な高まりを見てとることができた。他クラスの先生も、

授業が進むに連れて、もっと工夫できそうな環境設定をするなど、十分な支援をしてくれていた。単元を通して主体的に活動していた。

(2) 先生方との話し合いから

単元終了後評価表についての感想を伺った。すると、「評価表があることで授業のイメージがもちやすい。」「3観点で分けて見ることは難しい。」という意見をいただいた。また、評価表の見方として、「評価の視点で示された内容が出来ていたらAなのか、一番右側の視点までいけたらAなのか。」という質問を受けた。

(3) 単元を終えて

評価表の扱いについては課題が残った。AかBかを定めるためのツールではないのだが、どうしても評価したことが評定化への意識へとつながってしまう実態が見られた。「見取りと支援のための表」として活用してもらいたいが現在のルーブリック型の「評価表」では、難しい現状であることが分かった。

2.3 フィールドワークⅡへ向けての研究

夏休みの時間を活用して、「評価表」に代わる新しい形を模索した。その過程において、学びを得た3点について下に示す。

(1) 「学びのミライ地図」の描き方を読んで

山本(2022)は、「学びのミライ地図」を描ける自律型学習者の育成を目指した。自律型学習者は、「教師に指示されたことをただこなすだけではなく、自分で学びたいことを選択しながら力強く学ぶことができる。」と述べている。では、なぜ自律型学習者の育成が重要だと言われているのか。それは、自律型学習者の捉えが、「OECDラーニング・コンパス（学びの羅針盤）2030」の中で述べられているラーニング・コンパスの重要な概念である生徒エージェンシーと一致するからである。

また、生徒エージェンシーとは、Well-Being であるという目標に向かって学んでいる姿として捉えられており、Well-Being であることが個人的にも社会的にも教育の最上位目標として表されている。つまり、自律型学習者はこれからの平和で持続可能な社会を創っていく当事者として必要な人材だといえる。

(2) 横浜国立大学への訪問

フィールドワークⅠにおいて課題となった、どうしても評価を評定化（通知表）へとつなげようとする意識が働いてしまう実態について梅澤秋久先生に相談した。教えていただいた情報の一部を以下に述べる。

○体育科において評定化することは、これからの子どもが学びを創っていくような教育観からすると、必要ないのではないか。

○評定（通知表）の代わりとして、学んだ履歴を残しておき、保護者に発信することが大切。説明責任と言われるが、評定のための説明責任ではなく、説明責任の質が問われる。例えば、自己調整や自分達で最適解をいかにして創ったかのプロセスを動画やポートフォリオなどで残して置くといふ。

(3) 茅ヶ崎市立香川小学校への訪問

通知表をやめた小学校として、記事になった香川小学校に伺い、通知表をやめるに至った経緯や、子どもや教員、保護者が通知表をやめたことに対してどのように感じているのか、インタビューさせてもらった。ここでは、通知表廃止による意識の変化を述べる。

○通知表が無くなっても何も変わらないし、むしろ子どもは、学びに対する意識が高まった。通知表に縛られていたのだと思う。

○通知表がないことで、普段の授業をどうしようかということに意識を向けられて、子

どもに向き合うことが、プレッシャーなくできるようになってきた。

学校長からも、「通知表を無くすこと自体が目的だった訳ではなく、評価の在り方を皆で考えた時に結果的に無い方が良いという結論になった。」ということを教えていただいた。

(4) フィールドワークⅡへ向けての研究のまとめ

以上からの学びを次の3点に整理した。

①自律型学習者や自己調整学習を目指すためには、子どもが、自らの学びの過程をイメージできて、その履歴を残しておくようなものが必要である。

②通知表への記載を目的とするような、統一したAやBといった評価の基準を作成する必要はないのではないか。かえってそれがあることが、教師の見取る力や子どもの学ぶ意識を阻害してしまうことにつながるのではないかと。

③授業において子どもの学びをサポートできるような教師の関わりが重要であるため、評定化へと意識が向かわない、見取り評価に活用できるツールが必要である。

2.4 フィールドワークⅡの実践

ここでは、新たなツールを活用した実践を2点示す。

(1) 「学びの地図」の活用

第5学年「短距離走・リレー」において、「学びの地図」を活用した実践を行った。「学びの地図」は、授業の振り返りとして活用してもらい、その際6つの視点で（わかったことや見つけたこと・課題・挑戦したこと・あれいいなと思ったこと・動きで変化したこと・困っていること）書いてもらうようにした。この地図を活用することによって、学びの過

程が見える化されて、子どもも教師も次時の見通しがもてることを期待した。単元を終えてみて、子どもの中で今何をしているのか、次どうしたいかという思いが共有でき、学び方が分かっており、主体的に学んでいるようだった。「学びの地図」にも、課題をもって、それを解決する方法を発見した様子が書かれていた。授業を実践したクラスの先生からも、「この学びの地図があると個々の課題とか見やすく、次時の特定の子に対する支援が考えやすい。ただ、少し複雑で時間がかかるため、そのまま下学年ではそのまま使うことは難しいのではないか。」という指摘をいただいた。

「学びの地図」を例とした振り返りカードをくり返し活用することにより、子どもは自分の思考を整理できるようになった。また、教師は、子どもの学びの過程をふり返ることで、子どもがその単元でどのようなことを考えて、何に困っているのかといった情報を蓄積することができた。それをもとに、見取り評価に活用できるツールを模索した。

(2) 評価イメージマップの活用

第5学年「体の動きを高める運動」の実践において、マインドマップ作成ツールのサービスを提供しているAYOAの中から、円グラフ型の「ラジアルマップ」を用いて評価イメージマップ（以後評価ラジアルマップ）を作成した。それを担任の先生に活用してもらい授業を実践してもらった。単元を終えた後に、先生にインタビューをしたところ、「ポイントや発問のイメージがしやすかった」という意見をいただいた。また、「子どもと教員との関わり方や、子ども同士の関わり方についてもイメージマップから、事前に想定しておくことができたこと。特に今回の単元では、

一人一人のやりたいことや、それぞれの場での高めたい力について注目し、声をかけることができた。」とのことであった。

3. 今後の展望

当初の予定では、「評価表」を子どもとも共有することで、学びの質の向上を目指す予定だった。しかし、「評価表」がどうしても評定意識を与えてしまうことや、子どもの思考を誘導してしまう懸念があるため、共有するには至っていない。「評価ラジアルマップ」を作成した現在も、未だに共有には至っていないが、シンプルな形で示すことができないかと模索中である。

また、「評価表」からの変更もあり、「評価ラジアルマップ」の作成に至るまで時間がかかってしまった。現在、3学期の体育の授業において、事前に作成した「評価ラジアルマップ」を活用中である。そして、使用していただいた先生方から、有効性を確認していきたい。来年度に向けて、これまでの実践から見てきたことを生かしながら、各学年・単元ごとの「評価ラジアルマップ」を作成し、置籍校の先生方の誰からもアクセスできるフォルダーに置いておき、活用してもらいように働きかけたい。そうすることで、次年度以降、体育学習での活用が見込まれ、子どもの学びの質の向上が図れると期待したい。

4. 参考文献

- 1) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会,「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」, pp. 4-5, 2018.
- 2) 山本崇雄,『『学びのミライ地図』の描き方』, 学陽書房, 190p, 2022.
- 3) 白井俊,「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」, ミネルヴァ書房, p75, 2020.
- 4) AYO, <https://app.ayoa.com/>

「高校の体育授業における体育教師の専門性について ー選択制の授業実践（バドミントン）を通してー」

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

氏 名 天羽つかさ

キーワード：体育教師の専門性

実習責任教員 湯口雅史

実習指導教員 松井敦典

1 課題研究計画の設計

1.1 課題研究の動機

筆者は、大学院1年生の時に参加した教科教育課題設定FW(以下、設定FW)に参加した。実習中にバスケットボールの授業を行うことが決まった際には、専門(柔道)としている競技以外はあまり得意ではないため、体育の授業で実施するのは難しいと思いつつ、授業を考えて授業を行うと、指示する場面が多かったり、子ども全員に同じような言葉かけをしてしまったりと、個に応じた関わりができなかったと省察を行った。

設定FW終了後のゼミ活動中に、体育教師の専門性はどのように考えたらよいのかという話題になり、初めて体育教師とはどういう教師なのか考えるようになった。もともと、体育教師は、競技の専門性をもち、技術を伝達すればよいと思っていた。

しかし、少しずつ体育教師について学びを深めていくと、体育授業において教師は、自らが専門としている競技以外においても、体育的な知識をもって個に応じた関わりを行わなければならないということが分かった。それは、現在目指されている「令和の日本型学校教育」の学びが実現すると考え、設定FW終了後から教科教育課題FWⅠ(以下、FWⅠ)開始までに情報を収集した。

先行研究や文献を紐解き、理解を深めたうえで、徳島県立U高等学校(以下、U高)でFWⅠに参加し、選択制の体育授業を観察・実践した。U高では、5種目(バスケットボール・バレーボール・バドミントン・サッカー・卓球)の中から子どもがやりたい種目を選び、選択者同士で活動していくという授業であった。子ども同士で工夫をしてゲームに取り組む子どももいれば、活動の場に入っていけなくて端っこの方でゲームを見守る子どもも見られた。このような状況を見て、体育教師としての専門性を発揮し、全員が体育授業に参加できる授業を展開することが大切だと感じた。

1.2 課題研究の目的

高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説¹⁾の保健体育科の教科の目標を読み解釈する中で、子どもの活動を理解するだけでなく、子どもを見取り、必要に応じて教師が子どもに関わることが大切であると考えた。子どもが運動の楽しさや喜びを味わい、生涯にわたって継続して運動に親しみたいと感じることができたり、体育授業に主体的に取り組み自己の課題を発見し、思考判断したりできる授業には、体育教師の関わりが重要であると感じた。

そこで、子どもが体育が楽しいと感じ、生涯スポーツにつなげられる授業実践を磨くため

に、体育教師の専門性を理解し、体育授業で発揮できる教師力を身に付けることを目的とした。

2 課題研究プロセスの実態

2.1 体育教師の専門性について

体育教師は、授業のリスクヘッジや子どもの応答などを踏まえて授業を考えることが大切であるが、用意していた授業通り授業実践をするのではなく、その場や個人を判断し必要に応じて関わる大切であると考え。

佐伯胖(2003)²⁾は、「『プロになる』とは、臨機応変に、その場その場の状況に即興的に応じられるようになること」と述べている。

体育教師は種目の特性を理解し、「プロ」として関わり、子どもが「主体的・対話的で深い学び」ができるように、常に意識して教科や学びの本質を理解しておく必要があるのではないかと考える。

環境学習ガイドブック(福井県)の第2章の4³⁾に、指導者の役割として、3つの名称の指導者(インストラクター・ファシリテーター・インタープリター)について記載されている。

筆者は、「体育の専門性」について上述した指導者の役割が重要ではないかと考え、3つの役割が発揮される授業について考えていくことにした。

2.2.2 インストラクターとは

「インストラクターとは、知識や技術を伝える役割を担う人のこと。」³⁾と書かれている。子どものつまずきを見取って適切な技術情報を与え、子どものつまずきを解決することも大切な教師の役割だと考える。

2.2.2 ファシリテーターとは

安斎と塩瀬(2020)⁴⁾は、「ファシリテーターとは、ファシリテーションする人、もしくは役割を指し、英語で『促進する』や『容易にする』

と述べている。場をよく観察し、子どもとの関わり方を変更したり、子ども同士の関係に揺さぶりをかけたりしながら、子どもが意欲的に授業に参加できるようにすることが大切であると考え。

2.2.3 インタープリターとは

「インタープリターとは、自然やさまざまな物事について解説する役割を担う。」³⁾と書かれている。体育授業で考えると、子どもが話し合いをしている際に、その中で出た意見を要約して伝えたり、子どもがうまく言葉にして伝えられない際に、言いたそうなことを読み取って伝えたりすることなどが挙げられる。

3 課題研究の方法と実際

3.1 教科教育課題 FW I

「体育教師の専門性」を意識しながら、授業観察・授業実践を行った。

2022年5月9日から6月14日までの期間の中で15日間、鳴門市内のU高でFW Iに参加した。体育授業の中で、①教師の専門性(インストラクター、ファシリテーター、インタープリター)がどのように発揮されているのか、②子どもの取り組み方という視点で授業観察を行った。

①観察した授業は、主にインストラクトする場面が多かった。授業の初めの場面でゲームコートやゲームの行い方、ルールの指示などが見られた。子どもに任せるのは難しいと感じる場面は、前もってゲームの対戦相手やゲームコートの配置などを準備しておき、必要な指示のみしていた。活動時間をたくさん確保するためやなるべく多くの子どもが参加できるようにする一つの工夫ではないかと思った。

教師がしっかりと高等学校学習指導要領に示されている目標や内容を理解し、そのために教師は何ができるのかを考えることが大切だということが分かった。

②子どもの取り組みは、高校生ということも

あり、ある程度の技能が身に付いていたりある程度のルールを把握していたりしていると感じた。時間いっぱいまで楽しむ子どもや、自ら実習生に声をかけ一緒に種目を楽しもうとする姿も見られた。しかし、活動の様子を見ていると、どのような課題をもって活動に取り組んでいるのか、体育授業の中でどのようなことを学ぼうとしているのかが分からなかった。そこで、授業中においても実際に子どもに問いかけてみることも大切ということを学んだ。

3.2 授業実践の実際

FW I の授業実践では、第1学年を対象に球技ネット型「バレーボール」(キャッチバレーボール)を3時間実践した。球技ネット型のバレーボールのおもしろさを「ネットを挟んでのボールの落とし合い」と捉え、授業を行った。バレーボールコートにすることで、広すぎたり人数が多く動かない人が出てきたりすると考え、バドミントンコートを使用し、1チームの人数も4人にした。5人になったチームは、ローテーションを行いながらコートの中には4人とした。ネットを挟んでの落とし合いを行うため三段攻撃を意識させ、ゲームに参加していくことを推奨した。また、レシーバーとセッターはボールを手でキャッチしても良いというルールとした。しかし、3人目は必ず手で打つこととした。また、ワンバウンド制はなしにした。単元計画は、1時間目にバレーボールの面白さに気づき、2時間目と3時間目はネットを挟んでの落とし合いに夢中になれるよう、三段攻撃を意識してゲームをするという構成とした。

3.3 分かったこと

FW I での授業実践全体を振り返ると、3つのことが分かった。

1つ目は、教具・用具の工夫が大切であるということである。いつでも確認できるようにすることや理解しやすくするために、ゲームのルー

ルや学習課題は可視化できる教具を用意することが大切である。また、用具に対する恐怖心をもつ子どもを考慮し、アンケート調査を行い、用具の工夫に努めることが大切である。

2つ目は、学び方を提示することである。初めて経験することは、一度どのようなことをするのかを示さないと口頭だけでは伝わらない。実際にゲームに参加し、一緒に楽しみながら学び方を共有していくことも大切だということが分かった。

3つ目は、種目の面白さを単元初めに共有させることである。今回の授業実践では、バレーボールの面白さ(協力してボールの落とし合いをみんなで楽しむ)を全員に共有させることができていなかったため、「スパイクを打ったら陰口を言われそう」の意見が出てきた。全員が面白さを共有してそのコトに夢中になることができれば、このような言葉は出てこなかったのではないかと考える。

3.4 教科教育課題 FW II

2022年9月12日から10月14日までの期間の中で、15日間、FW I と同じU高で教科教育課題FW II (以下、FW II)に参加した。実習期間中に体育祭があったため、体育祭が終わるまでは体育祭の練習(ダンスの練習と競技の練習)に励んでいた。FW II では、①体育祭に向けての取り組み方 ②取り組み方の違いの背景を視点に授業観察を行った。

①体育祭に向けての取り組み方は、体育祭に向けて熱心に練習に励む子どももいればそうでない子どもも見られた。そうでない子どもは、座って仲間と話しをする姿が見られた。しかし、指示があり言われたことは指示通り動いていたので、全く練習に参加しないわけではなかった。指示通り動けるのは、指示者が目標・目的を伝え、真剣さがその子に伝わっていたからだと感じた。

このことから、声かけや日頃のコミュニケーションが大切だと感じた。

②取り組み方に違いが見られたので、何名かに話を聞いた。そうすると、目標があったり好きなことに対しては自ら取り組んだりすることができるが、やらされていることは、熱心に取り組まないということが分かった。子どもの意見から受動的になる原因があったため、その子の問題だけでなく、受動的になる何かしらの問題があることに気づかされた。体育授業でも、子どもがしたいこと(=欲求)があるうえで授業を構成していくことが大切だということが分かった。

3.5 授業実践の実際

FWⅡの授業実践では、第2学年を対象に球技ネット型「バドミントン」の授業(5時間)を実践した。

教師の意図は、子どもが授業を通して、余暇の時間にバドミントンを楽しめる生涯スポーツにつなげることを目標とし、まずは子どもの意見を活かした授業を展開しようとした。授業を重ねるにつれて、子どもから「長く続けたい」という思いがあったため、筆者は「記録に挑戦することが楽しい」と捉え、「どうすれば長く続けられるか」を考える授業とした。

3.6 「KH Coder(フリーソフト)の活用」

データは、授業中の教師の「言葉かけ」の様子をビデオ撮影し、音声データをテキストデータ化にすることにした。分析は、テキストマイニングで行った。使用したソフトは、樋口(2004)⁵⁾が製作・公開しているKH Coder(フリーソフト)を使用した。その結果をもとに、子どもにどのようなことを意識させ、どのように教師の専門性を発揮しているのかについて考察を行った。

授業を重ねるにつれて導入(準備運動)に関する言葉から学習課題に関する言葉が中心性を

示したり、出現回数が多くなったりした。「長く続ける」ためにどのようなことを意識しているのかのような工夫をしているのかなどを発問し、学習課題を意識した学びができるようにファシリテートしていた。また、どのようなことを意識しているのかのような工夫をしているのかが分からない子どもに関して、子どもの活動の様子からインタープリットすることで子どもが意識していたことが明らかとなった。

このことから、学習課題に関するファシリテーターやインタープリターの関わりをもつことができたと解釈した。

4 今後の課題

設定FWでは、子どもを見守るだけの授業であったが、FWⅠ・Ⅱを通して、子どもが思考できる授業がつくれたのではないかと考える。その一方で、技術的な部分においてあまり関わることはできなかった。タイミングや何を伝えればよいのかが難しかった。

今後は、教材研究をしっかりと行い、体育教師の専門性をどのようなタイミングでどのようなことを発揮すべきかを考え、子どもの思いや願いに応えられるようにすることが課題である。

4 参考文献

- 1) 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説「保健体育科 教科の目標」文部科学省P.21
- 2) 佐伯胖「学びへの誘い」東京大学出版会 p.34, 1995
- 3) 環境学習ガイドブック(福井県)「第2章 4 指導者の役割」
www.erc.pref.fukui.jp/sogo/d215/html/guide_2-4-1.html
- 4) 安斎勇樹・塩瀬隆之 「問いのデザイン」 pp. 184-185, 2020
- 5) 樋口耕一 「社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して」 ナカニシヤ出版 pp. 101-202, 2014

**体育の授業に積極的な参加が難しい子どもが楽しみながら
運動に取り組むことのできる体育授業づくり
～跳び箱運動の実践を通じて～**

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

堤 亮太

キーワード：特別支援教育，発達障害，跳び箱

実習責任教員 湯口 雅史

実習指導教員 南 隆尚

1 課題研究計画の設計

教育課題設定フィールドワーク（以下設定FW）は、全校生徒9名の小規模校に配属された。設定FW校の体育授業は、全学年での合同体育という授業形態がとられていた。通級による指導を受ける2名の児童や、6歳～12歳までの児童など、それぞれの有する発達段階や特性は様々であった。

中でも、通級による指導を受け、発達障害の疑いのある児童が体育の授業時に示す反応は多様であった。話し合いの活動に対する参加が困難である、指示を正確に受け入れにくい、ルールの理解に時間がかかる、モチベーションの維持が困難である、環境・活動の変化に対応しづらい、など様々であった。大学院では「誰もが楽しむことのできる体育」の重要性について学びを得たこともあり、障がいの有無に関わらず、体育でのスポーツや運動の楽しみを感じられるような授業の工夫が必要だと感じた。

そこで教科教育課題フィールドワーク（以下課題FW）Ⅰ・Ⅱにおいて発達障害児もしくは、その疑いのある児童に焦点を当て、特性を持つ児童が主体的に体育授業に取り組むことができる体育授業づくりについて、実践・検討したいと考えた。

社会の変化が急速に進行するこれからの時代は、子どもの個性や学びのニーズがより一層多

様化していくとされている。『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）（2021）でも指摘されているように、「支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現」することが今後、より一層求められるだろう。そのような授業づくりや子どもへの支援ができる教師力を身につけることを目的とする。

2 発達障害に関する近年の動向

2017年に文部科学省より「発達障害を含む障がいのある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン」が作成された。これらは、対象を発達障害のある児童等に限定せず、発達障害の疑いのある段階から教育上特別の支援を必要とする全ての児童等に拡大したといえるだろう。そのため、通常学級における発達障害児やその疑いのある児童に対する支援は、これまで以上に教育現場にとっての重要課題になったと考えられる。

文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」（2022）によると通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、小中学校では8.8%だったことが令和4年12月13日、「通常の学級に在籍する特別な教育的支

援を必要とする児童生徒に関する調査」が報告された。これらのことから今後も、発達障害のある児童生徒の通常学級においての在籍率は増加すると思われる。これに伴い、発達障害のある児童と健常児童との学習課題設定等において困難さを感じる場面も増加するのではないかと考える。今後はそれぞれの特性に応じた具体的な対応や授業実践時の工夫等の研究の累積が求められるだろう。

3 課題研究の方法と実際

3.1 教科教育課題設定 FW

設定 FW では全校生徒 9 名という小規模校に初めて伺った。小規模校の子どもたちは、幼い頃からずっと一緒にいて、それ以外の他者と関わるのが少ないと感じた。そのためか、新しい環境に馴染むのに時間がかかったり、初対面の人と関わるのに躊躇があったりする様子が見られた。中学校や高等学校など、進学していくにつれて今よりも人が多い中で生活していくことになるため、地域の人や近くの学校との交流を積極的に設けるなど、少しずつ慣れていくことが子どもたちのために必要な支援だと感じた。

3.2 教科教育課題 FW I

徳島市内の小学校で 6 年生のクラスを中心に授業の観察と児童との関わりを通じた実践を行った。配属クラスの中でも数名、他者との関わりや、感情のコントロール、身体を思い通りに操作することに困難を抱えている様子の児童が見られた。だが、特別な支援を要する児童に対しては、学校全体で見取り、見守り、必要に応じて支援を行っているように感じた。また、FW II では体育授業の実践を行うが、作戦を立てる際などに人との関わりに困難を抱え積極的な

参加が難しい児童に対する関わり方の難しさに不安を感じた。

体育の授業では、9、。マット運動で頭跳ね起きやロンダートなど、技を試行することに難しさを感じ、参加が意欲的にできているとはいえない児童が見られた。そういった児童に対する関わり方、言葉かけの仕方などをしっかりと学んでいきたい。後転ができない児童に対して、場づくりを工夫することで活動に対する意欲を高めるようなことができると感じた。

以上のことから、体育の授業に積極的な参加が難しい子どもに対する授業づくりとして、言葉かけ、環境づくり、ポジティブな行動支援を大切にしたい関わり方等が、大切になってくるのではないだろうか。大学院の授業では「誰もが楽しむことのできる体育」の重要性について学びを得たこともあり、特性や障がいの有無に関わらず、体育でのスポーツや運動の楽しみを感じられる授業の工夫が必要だと感じた。

3.3 教科教育課題 FW II

3.3.1 授業実践の概要

筆者は、第 6 学年器械運動領域跳び箱運動の授業（6 時間単元）を実践した。跳び箱運動の本質的なおもしろさは移動であり、移動の中にあるおもしろいコトは「いかにして跳び箱の向こう側に移動するコトに挑戦すること」と捉えている。このおもしろさの共有を単元前半に積極的に行い、クラス全員が、技が「できる・できない」を判断基準として跳び箱運動が「得意・不得意」と捉えるのではなく、「いかにして向こう側に行こうか」と挑戦することがおもしろいという跳び箱運動の見方・考え方を共有させたいと考えている。

3.3.2 抽出児の実態と支援

A 児

A 児は好き嫌いがはっきりしており、興味のない活動に対しては参加が難しい。課題 FW I 時に観察したマット運動の授業の際には教師の後ろに位置し、活動には参加できていなかった。自分の思い通りにならないと、ものを投げることもある。他の授業でもグループ活動にはうまく参加することが苦手である。日常的な関わりでは、信頼関係を築くことを大切に接するように心がけた。積極的に名前で呼ぶことや、常に共感する姿勢を持って接した。仮に、逸脱行動が見られた際には、本人の気持ちや思いを対話を通じて汲み取りながら決して否定することなく、共感的な姿勢を持って接した。体育授業の支援としては、好き嫌いのはっきりとした A 児には様々な場を設けることや跳び箱の置き方を工夫することで取り組むことのできるようにする。場を自由に選択できるようなかかわりをすることや、思い通りにならず感情的になったときには、これまでの挑戦を振り返らせ、失敗でないことを知らせ、クールダウンができるような配慮を行った。

B 児

B 児は身体能力が高く、体を動かすことは好きであるが対人関係を築くのが難しく、時に大きな声をあげて周囲の児童を遠ざけてしまうことがある。チームで協力して何かに取り組むことや、特に女子児童と話し合いをすることが得意ではない。日常的な関わりでは、A 児と同じく信頼関係を築くことを大切に接するように心がけた。積極的に関わりを持とうとし、安心してもらえるような関係性を築けるよう接した。抽象的な表現、曖昧な表現では指示が伝わらない

こともあったため、例を用いたり、数字で表したり、何をするべきか、いつまでにすべきか、などを具体的に示した。B 児に対しては、様々な跳び箱の場を設定することで、積極性を活かした挑戦活動が展開できるようにすることや、挑戦意欲を持続させるために、ゲーム性をもたせた活動への助言をおこなった。

3.3.3 分析の方法

データは授業実践後毎時に記録した抽出児の授業の様子と自身の関わりを授業記録としてテキスト化し分析資料とした。また、授業終了に子どもが書いた振り返りシートも参照資料とすることにした。分析は、樋口 (2014) が作成・公開している KHcoder (フリーソフト) を使用する。このソフトを使用することによって、文字列の中から文章を取り出したり、情報を取り出したりすることを可能にし、テキストの中に存在する本当の意味や、自身の振り返りの中で気づけなかったことを抽出できる。この方法をテキストマイニングといい、KH coder はコンピュータによって自データの 中から自動的に言葉を取り出す。これにより、語の選択にあたり主観的になり得る手作業を廃し、客観性を確保し、全体的な傾向を捉えることができると考える。

4 まとめ

4.1 考察

今回の実践では 2 名の児童ともに振り返りや活動の分析結果からも積極的に取り組んでおり、このことは成果の一つであるといえる。

A 児は、うまくいかないことにもあきらめず、こだわりをもって挑戦ができていたことや、他の児童の意見やめあてを参考にできてい

たことが分析の結果からも分かった。授業の様子からも、個々での活動が中心となる跳び箱運動であったが他の児童の様子を観察して自分の動きに取り入れてみたり、共に挑戦活動を行ったりするなど、FW中の授業ではあまり見られなかった他者と協働して学びに取り組む姿も見られた。自分の思い通りにならないことから逃げだすことや、他者との関わりが多くないA児にとって良い学びの提供ができたのではないだろうか。また、単元の終盤まで活動をやめることなく夢中になって取り組むことができていた。振り返りを参照してみても単元を通じて次第に行き方にめあてを持つことができるようになっていたことがわかった。

B児はめあてをきちんと理解し、助走の勢いや技の組み合わせを工夫しながら課題を解決するために様々な挑戦活動ができていたことが分析の結果から分かった。振り返りの中にもめあての言葉が多々使用されており、自分の中で課題を持ち、できないことへ挑戦ができていたといえる。授業の様子からも、色々な行き方を試行錯誤しながら挑戦できていた。単元を通じてB児の運動に対する積極性を活かした挑戦活動が展開できたのではないだろうか。

4.2 今後の課題

今回抽出した2名の児童は、授業に対して課題意識を持ちながら積極的に学習に取り組むことができていたといえる。だがクラス全体で見ると、自分の挑戦できる場がない児童や、挑戦活動に飽きてしまい活動が止まってしまっているなど、様々な要因から授業に取り組むことができていない児童が複数見られた。中には6年生に進級してから一度も体育の授業に参加したことのない児童もいた。数名の児童に注目して

効果的な支援を行うことはできたものの、教師である以上、授業に参加するすべての児童が行う運動のおもしろさを知り、夢中になって取り組むことができなければならない。すべての児童が取り組むことのできる環境設定の工夫を行いたい。特に、進級してから一度も体育に参加したことのない児童に対して参加を促すことができなかったことに悔しさが残っている。見学していて「楽しそう」「これなら自分にもできそう」だと跳び箱運動の魅力を感じさせることができれば、活動している子どもに関わったり、1回でも挑戦しようとしたのではないだろうか。複数の課題を同時に解決することのできない筆者自身の視野の狭さに、教師としての力不足を感じた。今後は自身の中に知識と経験を累積し、良い授業が実践できる教師になれるよう精進したい。

体育活動に関する適切な態度の育成を目指した授業実践

～豊かなスポーツライフの実現を目指して～

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

甲本 裕次郎

実習責任教員 松井 敦典

実習指導教員 湯口 雅史

キーワード：高校体育，資質・能力の3つの柱，豊かなスポーツライフ

1 緒言

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説体育編では、高等学校「体育」については、『生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続し、スポーツとの多様な関わり方を状況に応じて選択し、卒業後も継続して実践することができるよう、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の育成を重視する観点から内容等の改善を図る』と記されている。

「教科教育課題設定フィールドワーク」では、高校における体育授業のほとんどが、試合中心の授業ばかり行われていたことから、ただ単に試合をこなすだけでは、育成すべき3つの柱を考えたときに、「技能」は育成できても、それに関する「知識」やその他の資質・能力に関しての育成に課題があると考えた。高校の体育授業は、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現を目指すという点において、運動やスポーツに関わる最後の機会になりうる可能性があると考えられる。このことから、生徒が単に試合をこなしている状況から、生徒が主体的に考えて行動していけるような授業内での工夫や展開を行い、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の育成を目指した授業実践することにより、体育やスポーツを「楽しい」「頑張り

たい」「もっとうまくなりたい」と体育活動に関する適切な態度を育成し、豊かなスポーツライフの実現に繋げることが必要であると考えた。そこで、このことを解決するための授業実践を実施した。

2 授業実践方法

授業実践は、鳴門市内のN高等学校の1年生（29人）を対象に、「教科教育課題フィールドワークⅠ」では、ソフトボールの授業実践を、「教科教育課題フィールドワークⅡ」では、バスケットボールの授業実践を行った。

1時間目は試合を行わずに練習を行った。2時間目以降はソフトボールでは、練習グループと試合グループに分けて授業を行い、バスケットボールでは、練習を行った後に試合を行った。毎回授業終わりにワークシートを書かせ、また、授業の様子を把握するためのビデオ撮影を行い、これらを参考に、次の授業はどのようにすべきか、生徒が何につまずいているのかを発見し、次の授業の構想と授業の成果を検討した。

3 授業実践

3-1 授業実践「ソフトボール」

ソフトボールの授業実践では、1時間目にスタンドティーでのバッティング練習とキャッチ

ボールなどの練習を行った。2 時間目はキャッチボールなどの基本練習を行った後、全体を 2 チームに分けて試合を行った。3 時間目、4 時間目は全体を 3 チームに分けて 2 チームが試合を 1 チームが練習を行った。チーム分けは、事前のソフトボールの授業に関するアンケートで「経験者が固まってチーム力に差が出たことがあった」などのコメントがあったため、練習での技術力の観察と経験者へのヒヤリングを行い、筆者がチーム分けを行った。試合では、チームごとに打順や作戦を考える時間を設けたり、インニング開始時を走者満塁で開始するなどの工夫を行った。さらに、チームごとに打席の内容と打点をスコアに記録するなど、競技を「すること」のみならず、「みる、支える、知る」といった視点から、スポーツとの多様な関わり方を学ぶようにした。

3-2 授業実践「バスケットボール」

バスケットボールの授業実践では、1 時間目にドリブル、シュート、レイアップシュートの練習を行った。2 時間目は練習を行った後、ハーフコートで 4 対 4 の試合を行い、3 時間目、4 時間目は練習を行った後、フルコートでの試合を行った。チーム分けは、筆者が行った。試合では、チームごとに作戦や話し合う時間を設けたり、リングにボールが触れたら 1 得点にするなどの工夫を行った。そして、ソフトボールの授業実践同様にチームごとにスコアを記録した。「得点」、「シュート数」、「アシスト」などを細かく記録し、次回授業時にチームごとに提示することで、自己やチームの課題発見へと繋げた。

4 まとめ

授業後のワークシートから、「少しの間で上達できたと思うと、ソフトボールも楽しいスポ

ーツだと思った。」、「バスケットボールは苦手だったが、少しずつできるようになったので良かった。」など、「知識・技能」に関する記述だけでなく、「思考力・判断力・表現力等」や、「学びに向かう力・人間性等」に関する記述も多くみられた。これらの資質・能力は、生涯にわたって豊かなスポーツライフの実現を目指す上でとても重要な要素であり、今後の体育活動においても継続すべき適切な態度の一つである。このように高校の体育授業において、ただ単に試合をこなすのではなく、生徒が主体的に考えて行動していけるような授業内での工夫や展開を行うことで、3 つの柱の育成と、体育活動に関する適切な態度の育成をすることができたと考える。そして、この高校体育での経験が、卒業後の豊かなスポーツライフの実現に向けて大きく影響を与えてくれると考える。

5 今後の展望

今回の授業研究では、ソフトボールとバスケットボールの授業実践を行ったが、筆者自身が野球経験者であったため、ソフトボールの授業では、技術指導や練習のアイデアなど様々な専門性を活かした授業づくりを行うことができた。しかし、バスケットボールの授業では、専門的知識や技能がまだまだ足りていないこともあり、生徒から「教え方が難しかった」、「ルールがよく分からなかった」などの声があり、今後の課題の一つだと感じた。また今回の研究では、4 回の授業しか行うことができなかったため、1 つの単元計画で考えたときに、もっと練習の時間を増やすのか、チーム分けをある程度したら再編成する必要があるのかなど、生徒のニーズに合わせて授業展開を行う必要があると考える。

運動部活動と体育授業における生徒のつまずきと教師の言葉かけに関する実践研究

高度学校教育実践専攻教科実践高度化系

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育実践分野

大路 柊人

実習責任教員 藤田 雅文

実習指導教員 湯口 雅史

キーワード: 運動部活動, 体育授業, つまずき, 言葉かけ

I 緒言

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説保健体育編では、自ら運動に親しむ能力を高め、運動やスポーツに多様な形で関わることができるようにするため、入学年次では中学校第 3 学年との接続を重視して、選択のまとまりの中から選択した領域について自主的に取り組むことができるようにし、その次の年次以降では、全ての領域から選択し、生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続する資質・能力の育成に向け、知識と技能をより一層関連させ、主体的に取り組むことができるよう配慮することが大切であると記載している。

高校で初めての実習、NU 高等学校でのフィールドワークを通して、全体的に教師が生徒にかけける声掛けは、A 中学校保健体育科教員と比べると少なく、ほとんどないように感じた。A 中学では一から教えて最終的にゲームを行うが、NU 高等学校では、中学校である程度の基礎が出来ている状態であるため、入学年度からゲームばかりの授業展開で、先生方もゲーム形式で行うことがほとんどであると話していた。また、NU 高等学校の体育授業は、種目選択制であり、基本的に生徒たちは行ったことのある種目や専門種目を選ぶ生徒が多かったた

め、ゲーム形式の授業展開でも、授業として成立していた。

今回の授業研究では、生徒の運動部活動と体育授業中の運動技能のつまずきに気づかせ、それを解消するために主体的に反復し練習に取り組むようになるような教師の言葉かけ、さらに、生徒自身が運動部活動や体育授業が楽しいと感じ、上手になりたいとモチベーションを上げる言葉かけについて検討することとしたい。

II 授業実践と成果

（1）授業実践

教科教育実践フィールドワーク I では、ウォーミングアップ後、すぐにゲーム形式の主運動に移行する授業展開であったため、筆者も生徒に混じってゲームを行い、実際に中に入って気付いたつまずきを生徒に個別に伝え、どのように生徒が考えているのかななどを聞き、事例的に指導した。

教科教育実践フィールドワーク II では、体育祭のため、体育授業ではダンス等の体育祭種目を行ったが、意欲的でない男子生徒が存在したため、彼らに対して「もっと楽しもう」等の声かけを行った。

（2）成果

教科教育実践フィールドワーク I では、ただ単に体育授業中にゲームを行うだけ、

体育館の隅で座って話しているだけであった生徒に対して、授業内で個別に前向きの言葉かけを行っていき、生徒の立場に立って授業を行っていくことで、授業に参加する生徒が増えた。

教科教育実践フィールドワークⅡでは、ほとんどの生徒たちが主体的に体育祭の準備を行っていたが、意欲的でない生徒も若干名いた。しかし、彼らも、筆者が声かけをしてリードすれば、笑顔を見せてくれるようになった。

生徒たちのつまずきにいち早く気づき、実践しながら伝え、言葉かけを行っていくことで、生徒たちは真似をするように行い、指導の前と後では、技能の向上だけでなく、モチベーションも高まり、体育授業に対する意欲も高まっていた。

教師・指導者の言葉ひとつで生徒たちは前向きな気持ちに変わっていくのではないかと考えられる。

Ⅲ アンケート調査

教科教育実践フィールドワークⅠ・Ⅱでの体育授業後に、NU 高等学校の全学年、計 274 人を対象にアンケート調査を行った。

調査内容は以下の通りである。

- ①「性別」
- ②「学年」
- ③「現在・過去に運動部、クラブチーム等に所属していたことがあるか」
- ④「行っている（いた）運動種目」
- ⑤「今までに先生、指導者に教えてもらった運動技能のポイントの言葉かけの中で、最も心に残っている内容」

Ⅳ まとめ

アンケート調査の結果から、現在及び過去に運動部活動に所属している、していた生徒の大半が、教師、指導者から運動技能のポイントについて「言葉かけをされたことがある」と回答し、その内容は、技術的指導、前向きな言葉かけが多かった。

一方で、これまで運動部活動に所属したことがなく、体育授業の経験しかない生徒のほとんどは、「言葉かけをされたことがない」「印象に残っていない」と回答していた。

高校生にもなると、ある程度の運動技能と知識が備わっているため、ゲームを中心にした授業でも、豊富な運動量の体育授業が展開されていた。しかし、ゲームを流しているだけで、プレーを止めて技術指導を行うことがないため、運動部に所属していない生徒は、言葉かけについて印象が薄いのではないかと考える。

体育授業では、運動技術の指導を定期的に全体で行うだけでなく、個別指導も積極的に行い、生徒一人ひとりに合わせた、適切な言葉かけをし、技術ポイントを簡潔に伝えていくことが重要ではないかと考える。

Ⅴ 今後の課題

今後の課題は、以下の 3 点である。

1. 教師が生徒に言葉かけを行う際には、各運動種目における技術ポイントの専門知識をどれだけ持っているかが重要視される。

筆者は、野球経験者であるため、ベースボール型球技の授業では、技術指導を行う際の簡潔な言葉かけ、練習方法の助言をすることは可能であるが、専門外の球技に関す

る知識は浅く、運動技能も低い。

実際に言葉かけを行えない場面があったため、専門競技以外の体育授業を指導する際の知識を深め、運動技能のレベルアップが必要であると痛感した。

2. 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説保健体育編には、「主体的に取り組むことができるよう配慮することが大切」と記述されている。この記述内容を考慮すれば、高等学校の体育授業においては、懇切丁寧な指導をすることは控えなければならないとも判断される。したがって、各種運動技術のどの段階までの技術指導を行うべきなのか、どのようなつまずきに言葉かけを行うべきなのかの基準を考えなければならない。

3. 1 回の授業中に、全員を対象にして個別指導で言葉かけを行うことはできないため、言葉かけをする生徒の選別のしかたや全体指導と個別指導のバランスについても熟考しなければならない。

文献

1) 文部科学省 (2018) 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説保健体育編体育編, 東山書房, p.13, p.188

2) 藤田雅文・佐藤安通 (2017) 高等学校硬式野球部監督の言葉かけに関する研究：甲子園大会出場チームの監督を対象として, 鳴門教育大学研究紀要, 32, 506-513.

高等学校体育授業のサッカーにおける授業研究

高度学校教育実践専攻

指導教員 綿引勝美
実習指導教員 南 隆尚

芸術・体育系教科実践高度化コース

保健体育科教育分野

坂口真心

1. 研究背景

昨年の11月1日～11月11日の期間に引き続き、鳴門市内のNU高等学校に前後期の課題設定FWに参加した。(5月～10月の合計10週間)NU高等学校は2つのコースから形成されており、総合学科コース、スポーツ科学科コースに分かれている。特にスポーツ科学科コースは、県内や県外からのそれぞれの専門競技の優秀な人材を集めており、体育授業の中でもある程度のボール操作や身体能力が高い生徒が多い。

私は専門競技としてサッカーを10年以上やっていた経験もあり、サッカーの授業に着目した。サッカーの授業では準備体操し、教師がビブスとボール1個を用意しそれぞれのチームに分かれゲームをして終わるといった授業内容で、私も実際に生徒達と一緒に授業に参加した。授業観察や授業参加を踏まえて、全体的に運動能力の高い生徒が多く、ボールを蹴る事ができない、ドリブルをする事ができないといった生徒はほとんどいないと感じた。また積極的に授業に参加する生徒が多く、ゴールしたら全員で喜び合ったりするといった良い雰囲気で行っていると感じた。

実際に生徒達と一緒に授業に参加した時にボールを持っていない時にどういった動きをすれば良いかと質問してきた生徒が何人かいた。

こうした実態も踏まえ、私はサッカーの授業で単にゲームをして終わるといった授業内容だけでなく、授業の中で目標を設定するといった事や教師からの指導やアドバイスを組み合わせる事ができればよりサッカーの授業が楽しくなったり、もっと学びたいといった意欲が出るのではないかと考える。高等学校学習指導要領(平成30年告示)保健体育編では次のように記載されている。

次の運動について「勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法などを理解するとともに、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームを展開すること」「ゴール型では、安定したボール操作と空間を作りだすなどの動きによってゴール前への侵入などから攻防をすること」といったことからボールを持っていない時にどのような動きをすれば良いか、空間やスペースに侵入するためにはどうしたら良いのかといったことに加え、毎授業での目標設定を行い、その目標を達成するために自ら考え、主体的に取り組む授業で目標を持ち授業に取り組んだ時とそうでない時の変化や違いを明らかにし、授業の中で著者からの声かけやアドバイスや助言を与えることにより良い授業が行えるのではないかと考える。

その中でサッカーの授業への取り組み方や意識がどのように変化していくのかといったこと

に着目し研究をしていきたいと考える。

2. 方法

授業の前の休み時間やSHRの時間を使って生徒達にワークシートを配布し、3つの項目を設けた。著者が全員にワークシートの説明しその内の初めの項目には目標を記入してもらい欄があり、授業の前に生徒が自身の能力から到達可能な目標を考え記入してから授業に来るように指示した。授業では生徒が各自それぞれ記入した目標を意識し、達成できるように取り組んでもらい、授業終了後に目標を持った時とそうでない時の変化や違いを記入してもらい、これまでの授業と比較しどのように意識や取り組み方が変わったかを調査した。また授業の中で著者や他の教師からの声かけやアドバイス、助言をもらい、どう感じたのかを率直に記入してもらい欄を設けた。午後のSHR時に生徒に配布したワークシートを収集しそれぞれの意見や感想を観覧しどのような変化があったかを調べた。

3. 授業実践の内容

研究背景に沿って私は今回のFWIIで3つのクラスで授業を実施した。その中で今回の研究テーマとし2年1組、2年2組を対象とし授業実践した。なお、このクラスはスポーツ科学科コースの生徒であり、2つのクラス合同での授業であった。方法の欄でワークシートを用いて3つの項目を設けた。①本時の授業の目標を記入してください。②目標を決めて取り組んだ時とそうでない時との違いや変化を記入して下さい。③先生の指導やアドバイスや声かけを受けた感想を記入してください。この3がワークシートで設けた項目である。対象としたクラスの詳細は以下の通りである

日時, 場所, 対象,

日時 2022年10月13日 第1校時

場所 鳴門市内 NU 高等学校第二グラウンド
(人工芝グラウンド)

対象 2年1組・2年2組(スポーツ科学科コース) 男子 30人 女子 25人

授業実践の内容では、これまでの授業と同様でゲーム形式をメインとした授業を行った。その中で目標を記入してもらい授業終了後に著者の用意したワークシートを記入してもらい、授業の中ではこれまでの授業観察を含め、積極的に生徒にアドバイスや指導、声かけを行うといった工夫をした。

授業で使用したコートは、サッカーコート一面をセンターラインで2分割し片方を女子で行いもう片方を男子で授業を行った。

4. 考察

生徒に解答してもらったワークシートを回収し集計を取った。目標設定の項目として生徒の回答傾向から私は大きく3つに分類した。

(1) 目標設定の分類

① 自身のプレーやパフォーマンス

② 仲間との連携・コミュニケーション

③ その他

大きくこの3つに分類し、生徒達はどのような目標設定をしているかのデータを集めた。データを集計した次のような結果となった。

① 自身のプレーやパフォーマンスに対しての目標設定した人数が45人(81.8%)

② 仲間との連携、コミュニケーションでの目標設定は8人(14.5%)

③ その他では2人という結果になった。

(3.6%)

自身のプレーやパフォーマンスに対しては、「点を決める」「シュートを打つ」「ドリブルで1人突破する」「守備で相手からボールを奪う」などといった目標設定が多かった。

仲間との連携や、コミュニケーションの部分では、「チームで協力して楽しむ」「仲間に声を掛けて盛り上げる」「自分も楽しむ中で経験者でない子にも教える」といった内容があった。

その他では「怪我をしない」と言った事が記入されていた。

このことから生徒の半数以上は自分の目標達成可能な範囲で、尚且つ自身のプレーに対しての目標設定が多かった。少数であるが、仲間と一緒に協力して楽しんだり、自ら未経験者に教えるなどと周りを鼓舞したり援助したりする目標設定をされている生徒もいた。

こうした目標設定を行い生徒に授業の取り組みんでもらい、授業終了後に記入してもらう2つの項目(②目標を決めて授業に取り組んだ時とそうでない時との違いや変化③先生の指導やアドバイスや声かけを受けた感想を記入)では、生徒の授業に取り組む姿勢や変化が大きくあったことに気づけた。

5. 今後の課題

NU 高等学校は、冒頭でも少し述べたが、総合学科コースとスポーツ学科コースに分かれている変則的な一面もある学校だ。NU 高等学校では学活や総合の時間に進路に関する授業や企業の方が実際に学校に来られ、企業セミナーを行う事が多くある。私が FW I や FW II の期間でもこのような活動が多々あった。NU 高等学校のほとんど生徒は高校卒業後の進路は就職する生徒が非常に多い。高校を卒業しあっと

いう間に社会人として頑張っていかなければならない状況で、体育のこういった授業から、自身で考え行動する力や、人間性というものを形成していくべきだと感じる。

現代では予測不可能な出来事に対しての柔軟な対応をすると共に自ら道を切り開いていく力が必要となってくる。こうした意味合いでもサッカーの授業でも生徒が考えて取り組む事ができるような授業づくりが不可欠である。

どの体育授業でも教師からので指導やアドバイスをする機会というのが極めて少ない。これは果たして良いことなのだろうか。義務教育が終了し高校生という立ち位置でもあるのでそこまで指導しなくても生徒達自身で行うことを前提としての事なのかもしれないが、少なからず実際に著者からの目標設定の指示やアドバイスや助言といった要素を加えた結果生徒にとっても著者にとっても授業がより良いものになり、生徒とのコミュニケーションといった意味でも非常に有意義な時間となった事がわかった。

今後教員になるにあたって、生徒と関わっていく上で、生徒の気持ちやコミュニケーションといったものを大切に、授業でも生徒達が自ら考え行動する、取り組む事ができるような授業づくりができるように取り組んでいきたい。そして生徒にたいしてどのタイミングでどのような言葉がけをするか、言葉遣いや伝え方という部分は非常に重要になると考える。このような要素も自分の指導実践力や授業実践力や生徒に対してのマネジメント能力といった物を日々伸ばしていけるように、教材研究や毎授業での積み重ねを大切にしていき、生徒達に「先生の授業は楽しい」と思えるような環境、授業を試行錯誤して取り組んでいきたい。

6.参考文献

- ・高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 保健体育編 体育編
- ・高校のサッカー授業におけるスペースを活用した攻撃の戦術学習「第三の動き」の教材を用いた授業実践
（堤 誠太郎 三木 ひろみ 大平 正軌）
- ・人間の知覚—運動行動
編著者 萩原 仁 調枝 孝治
昭和50年9月15日 初版発行
- ・文部科学省 高等学校学習指導要領
（平成30年告示）解説 保健体育編 体育編
- ・スポーツ庁 学校体育・運動部活動
<https://www.mext.go.jp>
- ・【球技】 ゴール型：サッカー
<https://www.pref.lg.jp>
- ・中学校・高等学校年代でのスポーツの在り方—スポーツ先進国イギリスから日本が学ぶべきこと— 阿部 幹正
- ・高校体育における動機づけ雰囲気および目標志向生が生徒の体育授業満足感における影響
中須賀 巧 阪田 俊輔 杉山 佳生

教育の一番札所



国立大学法人

鳴門教育大学

編集・印刷・発行

第2版令和5年2月10日

保健体育科教育コース抄録集作成チーム